

【座談会】

住民参加調査座談会の記録



開催日 2025(令和7)年6月7日(土) 13:00-14:45

場所 伯耆町立溝口公民館 大会議室

参加者 妹尾 千秋 金田 裕己 松原 悦子 山根 宏子 田中 宏夫 阿部 香織
羽田 成夫 仲田 綾子 松原 優子 松原 隆
伯耆町教育委員会 角田 寛幸
島根大学 板垣 貴志 瀧口 翔 朝見 光彦



板垣

矢田貝家調査プロジェクトは10年もやりましたからねえ。うまくいったような時期もあれば、

どうしたらいいかなって迷ってるような時期もあったんですけども、今日は忌憚のない率直な意見をいろいろお聞きして記録に残したいと思ってますので、よろしくをお願いします。住民参加調査は43回も

やってるんですよ。

座談会の進め方ですけど。まずは自己紹介をしたあと、私の方からプロジェクトの経過をお話しして、記憶を蘇らせつつ内容に入っていきたいと思います。

では、島根大学からの参加者の自己紹介から。私が島根大学に着任したのは2015年です。その直後に同僚の先生や東京大学経済学部資料室の方々に関わって欲しいとお願いされて、その年の5月には山陰研究プロジェク

トとして伯耆町の矢田貝家調査を始動しています。実は、その時点では、矢田貝家には行ったこともなければ、資料も見えてないのに申請書を書くことになったんです(笑)。経緯に関してはあとで述べたいと思います。今日は、学生がふたり参加してくれています。



瀧 口

島根大学4回生の瀧口翔です。矢田貝家のプロジェクトでは、2年生と3年生の時に、2回ほど報告会っていうのをやって、結構面白いと思いながらやったので、今回の座談会も楽しみにしています。よろしくお願いします。



朝 見

同じく島根大学4回生の朝見光彦です。矢田貝家での展示解説では、砂防ですとか、その翌年は彫刻家の辻晋堂さんに関して発表させていただきました。本日はよろしく願いいたします。



妹 尾

私の母の里が矢田貝家と同じ上細見だったものですが、矢田貝の旦那さんってことで、いろいろ話をさせていただきました。多少は嘘をついているかもしれませんが(笑)。なんだかんだ楽しく10年間過ごさせていただきました。ありがとうございました。



金 田

伯耆町に住まいをしております金田と申します。近ごろ世間で供給不足や高騰で話題の“お米”も作っております。私自身、幼少期に米子へ転居して地元の歴史には疎いところがありました。しかし、今回の矢田貝家調査のおかげで町の歩みを知ることが出来て本当に感謝しています。この研究が終わってしまうのはあまりに惜しい、まだまだ続けていただきたいという思いです。



松 原(悦)

二部に住んでおります松原悦子です。古文書の会に入れさせていただいて、まだまだひよこの前の卵の状態です。古文書の会では、私は二部に住まいしてますから、出雲街道に足羽家っていうのがあって、その文書を読めるようになったらいいんじゃないかとお誘いをいただいたものですから、関わったらとんでもなく難しくて、まだまだ全然ダメなんですけど。矢田貝家のことも、知ることが大事なあとと思っています。まだまだ全然わからないんですけど、今日は皆様のお話を伺いたいですので、よろしくお願いします。



山 根

伯耆町の溝口側の福吉というマイナーな地区に住んでおります。山根と申します。古文書もなかなか上達してなくて読めません(笑)。矢田貝家調査のことは、忘れた

ことも多いですけども、ただ、学生さんの発表があった時に、知らなかった曾祖父のことが分かり叔母に報告した記憶があります。よろしくお願ひします。



田 中

田中と申します。鳥取市の人間なんで、こういう席におるべき人間ではないかもしれません。なんでこの会に出席するようになったのか、ちょっと記憶が飛んでしまっているのですが、自分のなかで勉強になったことは、庭園の仕事を50年近くやってまして、その仕事のなかでも、文化財庭園の保存とか修理というようなことを日常的にやってきました。矢田貝家の庭園には、ずいぶん昔に寄って見させてもらったことがあって、これは注目すべきだなと感じていました。鳥取県の植木屋さん、庭園関係の人の県による技術者講習会っていうのがあります。そこの世話をずっとやらせてもらっていて、矢田貝家を会場に借りて講習会をやるかということになりました。ですけど、まだその修復っていいですか、復元といいますか、きちっと作庭された当時の庭園の姿に戻すっていうのは、まだできてないわけで気にかけております。話が長くなりますのでこの辺で。



角 田

伯耆町教育委員会の角田です。矢田貝家住宅は庭園も含めてですけど、昔から大きな家が立っているっていうのは知っていました。ちょこちょこ様子を見たりしてると、ほとんど手も入ってなくて、時には泥

棒が入ったりするようなこともあったと聞いていました。国登録有形文化財になって、またこういった会で皆さんで史料を見ながらいろいろお話をされるようなこともあったりと、注目を浴びるようになって、とてもありがたいことだなと思っています。毎年、年末には学生さんがいろいろ研究されて発表されるのを楽しみにしていたんですけども、どうも今年で終わるということで、ちょっと残念だなと思ってます。記録にしてまとめをされるということで、どういったことになるのか楽しみにしております。よろしくお願ひします。



松 原(隆)

町内在住の松原と申します。私は、実は直接これに関わってないんです。1回だけ伯耆町の教育委員会におるときに、学生さんの展示解説に行かせていただいたことがありました。また、実は板垣先生とは初対面ではございませんで、例えば息子が鳥大の法文学部だったことで、ゼミ生ではなんですけど、お世話になったということを知っております。それから古民家沙々樹(鳥取県日野町根雨)で、先生が牛の講演をされた時にも訪ねたことがあります。ということで何回か馴染みがあるんです(笑)。矢田貝邸については、文書についてのプロジェクトには参加しておりませんでしたけれども、先ほど申しました学生さんの発表の機会に行ったりとか、あるいは伯耆町教育委員会の在職の折には、ちょうど車が矢田貝邸に突っ込みましてですね。壁の修理のことをさせてもらったことがございました。今日は勉強させてください。お願ひします。

板 垣

息子さんは考古学でしたかね。はいはい。覚えてますよ。まだ高校生の頃に私の講演会に来たんですよ。島大に入学しますって話したのを覚えています(笑)



阿 部

境港市から来ております阿部といいます。私も先ほどの田中親方と同じで、鳥取県の文化財講習の方で矢田貝邸の実践の授業を受けさせていただきました。もともと学生時代から造園の勉強をしていたこともありまして、文化財庭園に興味がありました。このプロジェクトがあるよってというふうに伺いました。その庭をつくった、その当時の文化的背景とか、その頃の人たちの価値基準とかが紐解かれていくようなところに興味を持ちました。やっぱりその庭だけの形ではなく、それが作られた文化的背景とか考え方ってというのがすごく重要だなあと。先ほど親方の話にもありましたけど、修復していくとか、本当の元の原型を探していくとかってというのは、まだ途中なんですけれども、その答えを見つけるためのヒントになっていくんではないかなと思って、勉強させていただいております。



羽 田

私も岸本に住んでいます。実は私は、中学校3年の時に岸本に来まして、その時の町長さんが矢田貝家顕造さんでした。非常に興味深く日記を読ませていただいて、昔の小さい頃のことも少しずつながら様

子がわかってきたので、非常に楽しかったです。でも実は一番楽しかったのは、学生さんと一緒に1つ1つの文書を写真を撮りながら読み合って、そうだよ、こうだよ、でもここ読めないよねってあのひと時が一番の楽しみでございました。あれがないのは残念だなと思いますけども、よろしくお願ひします。



仲 田

二部の仲田です。私は家に足羽家の文書があったものですから、古文書に興味持って、少しずつ読めるようになっていったんです。矢田貝家も古文書がたくさんあって、それが読めることを楽しみに来てたんです。皆さんと一緒にできてよかったです。



松 原(優)

やっぱり矢田貝さんってのは、子供の頃の町長さんだったのと、泥棒が入った時の大事件で、なんか蔵が荒らされたんですよ。そのようなことを聞いたのは、すごく子供心に印象に残っています。ただこのプロジェクトに参加させていただいたのは、出来心というか、なんかぼっと思いついて、全然何のつながりもなく1人で参加したんです。でも、その中で人間関係がいろいろできてきて、古文書の会にも入ってしまったりとか、そういうつながりも面白かったです。最初は、ちょっと民俗学の授業を受けたことがあったので、そういう観点から、近世とか近代の歴史とかいろんなその民俗学的なところに関心があって、一昔前はどんな生活してい

たのかみたいなところにすごく興味ありました。それからいろんな文章を読んで、この日記なんかも読んでいくうちに、大正とか昭和の初期とかいろんな出来事があって、それがきっかけでたどっていくと、また違う情報が出たりして。すごく知識の枝葉が広がって増えていくのがすごく面白かったです。

板垣

このプロジェクトをはじめる際の趣旨に一番近い感じだったかもしれませんね。こういった資料をきっかけに、それがコミュニケーションのツールというか、対話の道具になって地域で仲間ができて、そしていろいろなことも展開していくっていうのは、もしかしたら僕が一番目指していたようなところだったかもしれないと思いました。

※10年間のプロジェクトの経緯の説明は省略。本論集の総論を参照されたい。

まずは、大学側が矢田貝家の調査を住民の人と一緒にやってやろうなんて呼びかけた頃とか、それから実際に参加してみて、なんか感じたり、考えたり、思ったことがあれば、自由に発言していただけたらありがたいです。

金田

私がこの会に参加したきっかけは、先生の講演会チラシが魅力的だったからです。歴史を知らない人でも「なんだか面白そう…、一度聞いてみようかな」と思わせるような雰囲気がありました。実際、矢田貝家に関する講演を聴いたことで古文書の会との繋がりができ、交流する機会が増えました。この町に詳しくない人にとって、こうした興味を惹きつける活動やきっかけがあることは、地域と繋がるうえでとても大きな意味を持つと感じています。

松原(悦)

私は、最初の頃の立派な展示冊子を、何回分か家に持ってるんです。声かけもあったと思いますし、新聞なんかにも出てましたからね。私も他所から来た人間なので、伯耆町にもそういうのがあるのって知らないじゃないですか。ちょっと興味を持って行ってみようかと。その後、古文書の会に参加したのは、声かけでした(笑) こんなミミズの這ったような文字がはたして読めるんだろうかと思っていました(笑)。

妹尾

始まった頃は、古文書の会員の外にもいろいろな方がおられました。10年前には私より10歳以上も年上の方と日記などの資料を一緒に読んでいたことになります。その当時、私はもっぱら聞き役で、よう知っちゃうなあと感じながら聞いておりました。そのうちに年を経るごとに高齢のため来られない方がだんだんと増えてきました。逆に私の出番が多くなり、今では皆さんと一回り以上も離れたボケじいさんとなって参加させていただいています。

板垣先生がこのプロジェクトに地元の我々を呼ばれたのは、矢田貝家資料を読むと地元の方ではないと分からない地名とか風習、人名や言い伝えなどが出てくる。それを一緒に読みながら教えて欲しいということであったと理解しています。これらはどこかの本を調べれば分かるといったことではなく、日頃より見たり聞いたり経験したりした日常生活の諸々を語ることを意味しています。

私は86才になりますが、昭和20年終戦の年は5才でした。玉音放送も聞きましたし、農地解放前の倉屋(矢田貝家の屋号)も覚えています。5才の記憶は一生残るといわれてい

ますので、昭和20年頃からの諸々は自信を持って語れますが、それ以前の戦前のこととなると正直分かりません。私より10年前に5才になられた方は昭和10年頃からの見聞きした諸々を語るができます。このプロジェクトが始まった10年前には諸々に詳しい方が何人もおられました、今は私が最後の一人となりました。

もう一度再会をの声もありますが無理です。諸々を語れる住民がおられません。その意味でも今回のプロジェクトはラストチャンスをうまく切り抜けられたことになります。おめでとうございます。やはり寂しいです。楽しくて勉強になった10年でした。

江戸時代から続いていた資産家で、それなりにところどころに寄付をしたり施しをしたりして旦那さんと呼ばれていた旧家が後継者がいないということで、今年になって2軒潰れました。豪邸跡地にはあつという間に十数件の住宅が建ちました。古文書を分けていただきませんかという間もなくあつという間でした。残念ながら長い年月を待つことなく旧家のことは世間から忘れ去られることと思います。気の毒なことです。

矢田貝家はどうでしょうか。文化財に指定されていますが、母屋はさほどではないようです。使われている材木も普通の民家と変わりません。結局どうでしょうか。矢田貝家プロジェクトによってその歴史は末永く後世に残ります。めでたいことですが問題は母屋です。維持管理がたいへんだと思います。更地にされるのを見たくない気持ちでいっぱいです。そのための支援を真剣に考える時が来たようです。

板 垣

このプロジェクトは、妹尾さんとか戦前生

まれの方々がいろいろと昔語りしてくださるから、つながるところもありました。今日は居られませんが泉原さんとか。この世代の方が10年経つとなかなかこういった文化活動の場に来られなくなって、難しいところもあったなって率直に思います。

あとご存知のように、矢田貝家は分家が大きくなった新興の家なんですね。明治末頃の資産家一覧では、だいたい日野郡の近藤家が200万円ぐらいの規模の家としたら、矢田貝猶治は10万です。20分の1ぐらいの規模です。それでも旦那寺の瑞應寺に行くと、それこそ立派な屋根瓦などを寄付している。近辺の神社などには、矢田貝家の名の入った灯籠が残っています。ここの地域では、典型的な中規模地主ですかね。私は、特徴のないことが特徴といい続けてきました。でも庭園は特徴的だと思っています。

松 原(優)

ちょっと話がずれるかもしれませんが、親戚のおじさんと話をして、子どもの頃に町内の荘に住んでましたんです。その頃はその辺からアメリカ移民に出稼ぎに行く方がいらっしたようです。お金をたくさん稼いできて、それで仕送りをして。それで自分たちがこっちに帰国した時に、住む家が欲しいっていうんで、矢田貝家の建物を買って建てたそうです。私も行ったことがあるんですけど、2階建てのすごい大きな建物だったという記憶があるんですよ。倉屋の建物を解体して、それを持って行って建てたって聞いたんです。私、日記読んでいて、どこかにそういう家を売ったという記述がないかな、と思うんです。

板 垣

莊集落は、矢田貝家の所有する田畑の一番北側の端ぐらいになります。今の岸本の役場のあたりから莊ぐらいまでの範囲ですね。矢田貝家も隠居屋とかいろいろありましたから、ちょっと調べていないんでわかんないですけど、日記に記述が残っているかも知れませんか。

羽 田

撮影してた時は、なかなか楽しかったですねえ。やっぱり新しい文書が読めるし、その文書があることによって若い学生さんと、ここはどうだろうかという話もできるしね。今の学生さんといろんな話もできたし。まあ、私としては文書がたくさん見たかったっていうのがあると思います。確かにそのための事前準備は大変だなと思いましたね。

板 垣

さっきも妹尾さんも言われたんですけど、最初はもうちょっといっぱい人が集まったんですよ。いろんなものに興味のある人が集まったんですけど、結局はやっぱり読めるメンバーが残っていったっていうところがありますねえ。本当は、読めることに超したことはないんですけど、史料の撮影だったら参加のハードルが低いかと思ったら、そうでもなくてねえ(笑)。私は、撮影は作業をやらせてみたい感じになってダメなのかなと思ってたんですよ。それで教育委員会の長田さんとの相談で、やっぱり日記がいいよっていわれてですね。途中から日記解読に変えていったんですけどね。

仲 田

撮影は楽しかったですよ。座学になるとそ

んなに学生さんと話すようなこともなくなるので。日記も面白かったですよ。でもあの字は読みにくかったんですよ(笑)。

板 垣

やはり撮影でも、会話ができれば楽しかったですねえ。今知りましたよ(笑)。でもそれを楽しめるのは、ある程度読める方にとっては、かも知れません。

羽 田

まあ、確かに日記は、顕造さんの生活とかの様子はわかるんですけどねえ。その当時の社会の情勢とかが出るような中身は興味深かったです。例えば、戦争中に出征する人を送るときに、何月何日どこどこに行って、どんなふうにして出征の人をお送りするとか、それから戦地から帰ってくる時には、こんなふうにして皆さんでお迎えしますとか生々しいものがあるね。もう少しこう、当時の社会全体がうかがえるような資料、まあ日記だからしょうがないのかなと思ったけども、そういうものに目を通して、岸本という町はその当時はこんな生活が行われたんだな、こんな風習があったんだ、なんてことがより具体的に分かる内容があればなっていうような気はしましたね。日記を見ながらね。

松 原(隆)

いま文書の話が出ましたけれども、例えば現地に赴いて学習するひとつの意義として、やっぱり地形とかね、周辺的环境とか家の位置関係みたいなのを探ってみるのも意味深いのかなと思っています。そもそも矢田貝家に対する大きな疑問のひとつに、なんであそこにあるのかな、ということがあります。例えば、10年前に日野川が警戒水位を超えた

時がありましてね。隣の上細見ではもう避難勧告が出て、すぐに移動してくれということもあったりしました。非常に危険性のある場所に矢田貝家はある。まあ、水運の関係であそこにあるってことは聞いたことがありますけれども、とはいえずっと私は疑問だったものですから、もしよかったら教えていただければと思います。

板 垣

その要因のひとつはここで教えてもらったことがありますよ。上細見の集落は、古い山の裾の方を本村(ほむら)とって、日野川の方が外村(とむら)と呼んでいたようです。これは妹尾さんに聞いたことだったと記憶しています。だいたい古い日本の村落っていうのは山の裾に家を建てるんです。流水で水が取れるから。推測ですけども、幕末に分家をする際に、本村の方には家を建てる土地がなくて、外村にしたのではないかなと思っています。たしかに水流を使ったり、水車小屋があたりしてたんですよ。かつては、お酒造りなんかしてますよね。

妹 尾

おっしゃる通りで、あそこしか土地がなかったんですよ。日南の方から、本家が大江に出られて、そののちあそこに分家されたわけです。山すその方の高台のあたりが本村で、いわゆる古くからの家はそっちにあったわけですよ。

羽 田

それこそ中世の昔からずっとその土地に住み着いておれば、いい場所を持つてるだろうけども、他の地からきて分家して出た時には、やっぱりそういう形で土地が取れんので

しょうね。

板 垣

山根さん、いかがでしょうか。

山 根

私は、一番最初からではないではなかったですね。最初から参加されていた泉原さんとかに声かけてもらったんだと思うんです。撮影する場所にはいましたけど、もともと古い時代のことは知りたいという興味があったんですけど、自分でどこかに入って行く勇氣はなかったのですが、古文書の会に入ってから声をかけていただいてありがたかったと思います。

板 垣

その後、長いこと付き合っていたいただいてありがとうございます。

山 根

面白いです。一生懸命調べられたことで、全然知らなかったことがいっぱい発掘されるので楽しかったです。

板 垣

せっかくなので阿部さんいかがでしょうか。阿部さんも途中からでしたよね。いつぐらいかな、コロナの前ですよ。庭園への関心があったからってことはおっしゃってたんですけども、田中さん経由で知られたんでしょうか。

阿 部

そうですね。

田 中

僕たちは、多分庭園経由だと思うんです。庭園の関係であそこ行ったら史料をいっぱい並べてあったり、いろいろなことがあって、これはなんじゃないかっていうようなことで、こういう会があることを知ったと思います。まあ、入らせてもらったのは、庭園がどういう経緯で造られたのか、それで顕造さんが、どういう性格の人でこういう庭園になったのか。庭園研究のうえで一番大事なことなので、ぼつぼつと参加させてもらったのが最初かな。私は、生まれも育ちも今現在も鳥取市の河原町ですから。このあたりの風習とは、若干違うんですね。お話を聞いていくと非常に面白いこともありましたね。

阿 部

たぶん鳥取県文化財課の池田さんに紹介していただいたと思います。こんな会があるよって。講習かなんかの頃に、もうちょっとこの庭園が造られた背景とかなんかないんだろうか、っていう話をしてて、多分紹介していただいたんじゃないかな。

板 垣

角田さんはいかがでしょう。取り組みの前半は教育委員会の長田さんが主担当で、私もと一緒はずっとやってんですけども、どんなふうに見ておられたとか。

角 田

そうですねえ。ちょうど違う部署にいたので、なかなか情報が入ってきてはなかったです。教育委員会がやっている程度の感じでしたよね。やはり担当とか同じ部局じゃないと、そこまで関心度は高くなかったですね。ちょうど2015年から教育委員会には居り

ませんでしたので。ただこの調査は、今までの行政主体のものから行政と大学、住民が協力して古文書を整理、調査するもので本町では初めての試みでした。地域に残されている歴史文化の掘り起こし、地域づくりへつなげる活動だと思います。今後は、矢田貝家住宅とあわせて大量に保管されている古文書をいかに活用するのが重要になってくると思います。

板 垣

課題は文化財の活用ですよ。これは古文書なんかも含めて、先ほども妹尾さんがいわれているように、旧家には死蔵されている史料がいっぱいあると思います。溝口でも岸本でも。

羽 田

個人的に古文書を見たいといっても、絶対に見せていただけないですよ。やっぱり行政か、いわゆる大学の研究の立場からでないと難しい。そういうあたりを伯耆町に残っているうちに働きかけていただきたいと思いますね。さっき足羽家の話をされたけど、ここは二部の本陣ですよ。溝口にもあるんですよ。だいたいどのお宅かはわかるんですけども、その方に聞いてもわからない、まだ蔵も開けてないと。まあ、いつか蔵を開けた時といったぐらいで話は終わるんですよ。

松 原(優)

なんかね、よく建て替えられるときのタイミングで全部捨てちゃったとか、そういう話をよく聞きます。うちの近くのずいぶん古いお宅なんかでも。もう処分しちゃったとかっていうのがあちこちで聞くので、もう本当に早くやっておかないと無くなっちゃいます。

板 垣

ここにいるメンバーは、そういうふうなものに関心があるけども、関心のない人もいますからねえ。代替わりとかで。あとは、古文書を読む会の今の課題をお聞きしたいですね。どんな課題があるのか。せつくなので他の地域と共有する意味でも、いかがでしょうか。

妹 尾

まさに風前のともし火じゃないですか。むしろ覚えることよりも忘れることが多くなってきて(笑)、いろんな方に声をかけたんですけど、入ってやるという人が少ないですね。10年以上前には、自分で調べて郷土史家って呼べるような人が何人もおられたんですけども。古文書の解説は地味で根気のいる活動ですので、文化振興会の歴史部会と連携しながら活動を続けたいと思っています。矢田貝家のプロジェクトがなくなりましたので、戦争遺跡調査プロジェクトを立ち上げる準備を進めています。

松 原(隆)

私も古文書を読む会に所属しております、そのきっかけは、大先輩の妹尾先生から強い勧誘をいただきました(笑)。いつも思うのは、読めることと分かることは随分と段階が違うなあということにして、米子に出るにしても歩いているのか、電車なのか、それをイメージしながら読めるかどうかで、分かるかどうかが決まってくるように感じています。そこの理解は、なかなか古文書を読む会だけではできないものですから、その当時の世の中全体の雰囲気とかね、あるいはこの地域の特性とか、いろいろなものを加味しながら分かってないと、読むだけで分かってない

なあと感じることがつくづく多いです。それは諸先輩方の生活経験を聞きながら分かることが多いので、それをどこで勉強するのは、ひとつの大きな課題かと思います。

金 田

矢田貝顕造氏の日記には、頻繁に米子に出掛ける様子が記されています。私の世代はかつて西伯線(法勝寺電車)で米子に通ったわけではありませんが、今も保存されている当時の車両を目にするたびに、「これが皆の生活の足だったんだ」と昔の暮らしを意識します。こうした地域の記憶を学生さん方が研究を通して忘れ去られないように残してくれる。それは本当に意義深い大切なことだと思っています。

板 垣

私は、生活世界って言葉が好きでしてね。自分たちが生活している身の周りの見え方っていうのがね。生活世界の過去の姿を知ると、日記だろうが、書簡だろうが、この自分のいま生きている生活環境がちょっと少し変わって見えたりとか、愛着が湧いたりとかね。別の見方ができるようになったりとか。矢田貝家のプロジェクトは、そんなところを少し目指している側面もあったんですけどね。

妹 尾

10年にわたって大学の方から古文書のアカデミックな取扱い方とか手法を学ばせてもらったのはとても良かったと思います。あと20年ほど時間があれば(笑)、もっといろいろなことが地元でできるのになあと思っています。手法を参考に戦争遺跡調査のプロジェクトを立ち上げる予定です。

羽 田

いま子どもたちには、地域を愛する心を育てるという運動が多くてね。各小学校のなかでも地域のことを学ぶんだけど、私たちはやっぱり大人自身がもう少し地域を学んでいくことが大切だと思います。長い目で見て、すぐに経済的に結びつくようなものではないんだけど、こういう地域の歴史だとか、いま残っているんな文化というものを、やっぱり大人も一緒に学んで、世代で絶えることなく伝えていく。長い目で見たらやっぱり郷土が生き続けていける道ではないかなと思うんですよねえ。

板 垣

生活世界の過去のあり方を眺めると、今の見え方が変わるんじゃないかっていうことをいいましたけど、過去、現在、未来をつなげていくことが重要で、例えば民俗学で伝承って言葉を使うんです。それは地域の過去を大人が知って、今はもちろん知っているわけで、そのことによって未来に向けてこれから育ていく子どもたち、今後この生活世界で生きていくであろう人に対しての、なんていうかな、責任とまではいわないけども、未来のことを考えるモラルですね。ある種の倫理を培うことになるという議論があるんです。少し難しい話をしていますけれども、過去にいろいろと努力した先人たちの姿を、現在の私たちが知り、それを自分ごととして同じ生活世界で未来に過ごすであろう人たちのことを考える。過去、現在、未来につながるモラルをつくっていくってというような側面が、この文化活動にはあると思っています。先ほど羽田さんがいわれたようなことは、たんに古いことを知って面白いなだけじゃないものがあると思います。じゃあ、せっかくなので、未来

を背負う学生たちに聞いてみようと思います。

瀧 口

自分はこの大学に来てから、こういった地域の近現代史ってものを知ったんです。今までは多くの一般人というか、なんか普通に地域で生活していた庶民にスポットを当てたり、その史料を用いたりとか、また今回もそうですけど、いま生きてる人と関わり合っ研究するとか、交流を持つという考え方が、そもそもすごい新しい発見だった気がします。やっぱりこういうコミュニティ的なあり方っていうのはすごい面白いなと思いますし、こういう活動が続いていったらいいなって感じます。

朝 見

僕は、展示に際して砂防ダムをテーマに調べたんですけども、調べていくうちに、人の命や暮らしを守るために、砂防の計画ってのがあって、いまま脈々と続いているということがわかって、そういった先人の方々の歩みですとか、その砂防事業が不況対策から始まったこととか新たな側面が見えてきて、当たり前そこに存在していたものが、事象や人物について改めて考え直すきっかけになりました。そのような視点を得られたのがとても良かったです。また、地域コミュニティに関しては、矢田貝家のような地域資料が地域の人をつなぐ文化資源としての活用方法があるとか、そういった側面もあるということを学べて、将来の仕事でも、こういった経験を活かしていきたいと思います。

板 垣

みなさん、今日はどうもありがとうございました。